

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12432

研究課題名(和文) 我が国ブライダルツーリズムのビジネスモデル化研究

研究課題名(英文) Business modeling study of bridal tourism in Japan

研究代表者

今井 重男 (IMAI, Shigeo)

千葉商科大学・サービス創造学部・教授

研究者番号：40596657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：当初の研究計画では、文献調査、業界関係者およびブライダル・サービス利用者のインタビュー調査を通じて、ブライダル・サービスとニューツーリズムの関係性整理とブライダルツーリズム輸入の仮説構築を行う予定であった。しかし研究開始時(2020年度)以降、新型コロナウイルス感染拡大によってブライダル市場はほとんど活動停止状態に陥った。特に国内外の観察地域渡航が実現しなかったため、代替措置として研究テーマに直接的・間接的に関連ありそうな資料渉猟とその精読を基本とした研究活動を推進した。そして研究期間延長を申請した研究4年目に、後れを取り戻すべく各観察地を訪問しインタビューを実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究を通じて次の点が明らかになった。1点目は、利用者の著しいニーズの変化を覚知したことである。例えば新婚旅行先が海外から国内へシフトしたことなどは典型的事例である。また、これまで結婚式後であった旅行実施時期が、式前ニーズが増えた点も大きな変化である。2点目は、リゾートウエディングに代表されるブライダルツーリズムの実施規模が小さくなったことである。結婚する2人だけや、家族が帯同する程度の規模が主流で、以前散見されたような友人知人や同僚も招待するスタイル激減した。このような、利用者ニーズの学術的な分析は、ささやかながらサービスを提供する側にとって有用な示唆を与えられたのではないかと自負する。

研究成果の概要(英文)：The original research plan was to organize the relationship between bridal services and new tourism and to construct a hypothesis for bridal tourism imports through a literature review and interviews with industry professionals and bridal service users. However, since the start of the study (FY2020), the bridal market has been almost completely inactive due to the spread of covid-19. In particular, since travel to domestic and overseas observation areas was not feasible, as an alternative measure, we promoted research activities based on the negotiation and close reading of materials that might be directly or indirectly related to the research theme. In the fourth year of the study, I visited each observation site and conducted interviews in order to make up for the delay.

研究分野：ブライダル・サービス

キーワード：ブライダル・サービス ブライダルツーリズム 新婚旅行 リゾートウエディング

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、ブライダル・サービス、とりわけ観光分野に関連するそれについて、仮説構築と事例調査を通して、新婚旅行やリゾートウエディングにとどまらない新たなサービス＝ブライダルツーリズムを、国内外の顧客に向けて提供する企業・観光地に有益な示唆を与えることである。

ブライダルツーリズムとは、リゾート地・観光地における挙式や新婚旅行に限定せず、広くブライダルに関連した経験をする旅として、研究代表者の先行研究「『ブライダルツーリズム』の開発と展開可能性」で定義づけた語である。我々はハワイとラスベガスを先進地と捉え、ブライダル・サービスとニューツーリズムの視点で実地調査し、わが国での展開を研究する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ブライダル・サービス、とりわけ観光分野に関連するそれについて、仮説構築と事例調査を通して、新婚旅行やリゾートウエディングにとどまらない新たなサービス＝ブライダルツーリズムを、国内外の顧客に向けて提供する企業・観光地に有益な示唆を与えることにある。ブライダルツーリズムとは、リゾート地・観光地における挙式や新婚旅行に限定せず、広くブライダルに関連した経験をする旅として、研究代表者の先行研究(基盤 C,16K02081)で定義づけた語である。

1年目に文献調査と関係実務家や消費者へのインタビュー調査を実施し仮説を導出する。2年目は導出された仮説について、ブライダルツーリズムの先進事例を実地調査し課題を抽出するとともに、国内の仮想展開地域を訪問し可能性を探る。計画最終年の3年目は、ブライダルツーリズムの可能性に関する公開シンポジウムを催して研究成果を産学および観光地へ提示する。

3. 研究の方法

研究代表者は2012年度からブライダル・サービスに関する研究を本格的に始め、リゾートウエディングの地として人気の軽井沢に注目し、支持される理由を明らかにした(今井,2014)。また2016年度から「『ブライダルツーリズム』の開発と展開可能性」(基盤 C,16K02081)を開始し、本研究で用いるブライダルツーリズムを“ブライダル”に関連した経験をする旅として定義づけた。当該研究において、ハワイとラスベガスをフィールドワークし、ブライダルツーリズムの充実ぶりとその人が気の観光資源であることを理解するとともに、新婚旅行やリゾートウエディングに関する国内外の各種資料を博捜整理した。こうした知見は、本研究の予備調査として大いに活用していく。

一方、研究分担者は20年に亘って観光研究および教育の実績を有し、旅先での体験や交流を重要視した“ニューツーリズム”と言われる新時代の観光現象を考察してきた。なかでも、農村地域における農業体験や農家交流を目的としたグリーン・ツーリズムを中心に各地での事例研究を重ねてきた。また、スポーツ観戦あるいはスポーツ体験を目的とした観光であるスポーツ・ツーリズムに関する研究にも取り組んできた。本研究でテーマとしたブライダルツーリズムもニューツーリズムの一種であり、今後さらに進むであろう観光の多様化の中で、他のツーリズムと比較しながら特徴や傾向を分析することは重要であると考えている。

このような研究実績のある研究代表者と分担者が、ブライダル・サービスの観光分野研究として着目したのがブライダルツーリズムのわが国への輸入であった。具体的には、我々の考えるブライダルツーリズム先進の地、ハワイとラスベガスの徹底した実地調査を、ブライダルサービスとニューツーリズムの視点でとらえ、そのわが国での展開研究となる。また、これまでの研究を通じた必要性に加え、本研究は時機を得たものであると考える。それは、日本の国会でIR法案が成立し、現在カジノを中心とした新しいツーリズムを模索する段階にあり、ラスベガスにおけるカジノ以外の人気観光資源を研究することは学術的独自性と創造性に富む内容であると考えている。

4. 研究成果

本研究の終了を機に期間全体を振り返ってみたとき、新型コロナウイルスの世界的感染拡大の影響を受け、採択年度(2020年度)～(研究期間延長後の最終年度である)2023年度まで研究遂行が極めて困難な状況であったと痛感するものである。特に研究の大きな痛手となったのは、ブライダルツーリズムに必要な要件を探ることを目的に予定していたフィールドワークが、感染拡大を封じ込めようとした日本政府の強力な行動制限によって(長期にわたり)実質的に不可能な状況が続いたことであった。それは、現地のインタビューを通じて獲得が期待された“肌感覚による覚知”が、ほとんど得られないという状況をもたらしたのである。

2020年度の研究初年度以降、新型コロナウイルスの拡大と収束の状況から、年度初めに研究計画の見直しを精力的、あるいは柔軟に行ってきたが、世界的規模での蔓延状況は瞬間瞬間で各国の感染拡大防止措置に影響を与え、我々の研究遂行に大きな障害をもたらしたのであった。感染拡大中特にブライダル市場はほとんど活動停止状態に陥った。しかも、国内外の観察地域渡航

実現が不可能(=移動規制中)な時期は、代替措置として研究テーマに直接的・間接的に関連ありそうな資料渉猟とその精読を基本とした研究活動を行った。

翻って研究最終年度である2023年度は、5月8日に新型コロナウイルス感染症の位置づけが「新型インフルエンザ等感染症(いわゆる2類相当)」から「5類感染症」になったことを受けて国内・海外移動制限が解除され、これまで実施することができなかった各地のフィールドワークが解禁となった。本年度我々は、これまで抑制してきたフィールドワークを実施した。遅れを取り戻そうと懸命に研究に取り組んだが、当初計画で期間前半での実施を予定したフィールドワークが最終年度にずれ込んだことで、獲得した情報の検討・吟味に十分な時間を割くことができなかった。このことは我々にとって痛恨の極みである。

研究成果に基づく業績は、論文が5本、海外学会発表1回である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山田耕生	4. 巻 50
2. 論文標題 訪日外国人旅行者による新婚旅行の発展可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CUC View & Vision	6. 最初と最後の頁 110-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今井重男	4. 巻 第33巻第2号
2. 論文標題 現代日本の新婚旅行報道 - 戦後日本の『読売新聞』よりー	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『国府台経済研究』	6. 最初と最後の頁 5-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田耕生	4. 巻 第33巻第2号
2. 論文標題 世界のハネムーン人気目的地の動向 モルディブの事例ー	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『国府台経済研究』	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田耕生	4. 巻 第33巻第2号
2. 論文標題 世界のハネムーン人気目的地の動向 イタリアの事例 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『国府台経済研究』	6. 最初と最後の頁 30-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田耕生	4. 巻 第33巻第2号
2. 論文標題 イタリアにおける訪日ハネムーン旅行動向に関する考察 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『国府台経済研究』	6. 最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Kosei Yamada
2. 発表標題 A Study on the Process of Value Co-Creation with Customers in Hotel Company
3. 学会等名 Euro CHRIE Vienna 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	山田 耕生 (YAMADA Kosei) (70350296)	千葉商科大学・サービス創造学部・教授 (32504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------